

大学適応に影響する要因としての 入学動機に関する基礎的検討

中村 真*・薊 理津子**

要 約

中村・松田(2013, 2014)は大学生を対象とする一連の調査研究において、大学不適応、大学満足、就学意欲に影響する要因を検討した。その結果、授業理解の困難さとともに大学への帰属意識の低さが大学不適応に影響する強力な要因であることを指摘している。また、「友人関係」および「入学目的の明確さ」は、「大学への帰属意識(大学への愛着)」を媒介して大学不適応の低さに影響しており、間接的な影響をもつことを示唆する知見を得た。

ただし、これまでの研究では、入学目的をはっきりとした目的があって大学に入学したのか、目的が曖昧なまま入学したのかという視点に絞って検討しており、大学生が具体的にどのような目的で入学したのかという問題は取り扱わなかった。

そこで、本研究では、大学生の入学動機がどのような要素からなるのか、そして、入学動機は大学適応にどのような影響を及ぼすのかを検討した。その結果、本研究の調査対象となった大学生は、「環境のよさ」「将来展望」「学問的探究」「自由・享楽」「世間体・同調」「出会い・集い志向」などの動機に基づいて大学に入学しており、このうち、「将来展望」と「環境のよさ」は就学意欲を促し、大学満足を高める傾向があることが示された。また、女子学生においては、「自由・享楽」と「知名度・評判」が就学意欲および大学満足に対して抑制的に影響する傾向が示された。さらに、「環境のよさ」は大学への帰属意識を媒介して間接的に大学不適応の低さに影響する可能性を示唆する結果が得られた。

キーワード: 就学意欲、大学満足、大学不適応、入学動機、大学への帰属意識

問題・目的

中村・松田(2013, 2014)は大学生の学校適応を支援するための基礎的研究として、大学への帰属意識と学校適応との関連に関する検討を行い、授業理解の困難さが大学不適応に影響する大きな要因であること、そして大学内での友人関係の良好さおよび入学目的の明確さが大学への愛着(帰属意識)を高め、大学への愛着が学校適応を促進するとともに学校不適応を抑制する傾向を示

唆する結果を得た。これらの研究成果は学校適応の指標として「主観的な適応感」を用いて得られた結果に基づくものであったので、中村・松田(2015)では出席率および成績評価(GPA)の客観的指標を用いて以上の問題を継続検討することにより、大学への帰属意識が大学不適応を抑制する要因であるという一連の研究知見の妥当性を実証した。

このように、一連の研究を通して、友人関係および入学目的の明確さが大学への帰属意識を媒介して大学適応に影響する要因であることが明らかになったが、ここで言う「入学目的の明確さ」は、はっきりとした目的があって大学に入学したのか、目的が曖昧なまま入学したのかという視点で得られた知見であった。これまでは大学生が具体

2016年11月30日受付

* 江戸川大学 社会学部人間心理学科教授 社会心理学

** 江戸川大学 社会学部人間心理学科専任講師 社会心理学

的にどのような目的で入学したのかという問題は取り扱わなかったが、入学動機が入学後の大学生生活を方向づける重要な要因であることは説明を待たないであろう。そして、実際の入学動機は多様であり、同一の学生が複数の動機に基づいて入学する場合も多いと考えるのが自然である。

したがって、本研究では、大学生の入学動機がどのような種類・要素から成るのか、そして、入学動機は就学意欲、大学満足および大学への帰属意識や大学不適応にどのような影響を及ぼすのかを質問紙調査を行って詳細に検討する

方 法

調査協力者

首都圏の四年生大学の学生 419 名(男性 182 名, 女性 237 名, 平均年齢 19.13 歳, SD 1.28)を対象に 2016 年 9 月に質問紙調査を実施した。調査対象者の内訳は、表 1 の通りである。

表 1 調査対象者の内訳

	1 年	2 年	3 年	計
男性	102	60	20	182
女性	132	84	21	237
計	234	144	41	419

調査内容

調査は、①大学への帰属意識、②大学生生活の満足感・不適応に関する質問、③大学への入学動機、④授業理解の困難さ、⑤友人関係の良好さおよびフェース・シートで構成された。具体的な内容は次の通りであった。

①は、中村・松田 (2013) が、高木 (2003) の「組織コミットメント尺度」、越 (2007) の「所属集団に基づくアイデンティティの測定尺度」、本多・井上 (2005) の「学級集団帰属意識尺度」、野寺・中村 (2011) の「向大学態度尺度」を参考にして、これらの一部を引用 (または大学への帰属意識を測定するのに相応しい表現に改変) し、新たな項目を加えて構成したものであり、「〇〇大学の学生であることを誇りに思う」など 25 項目 (6 件法) から成る。本稿では、その第一因子である「大学への愛着」(7 項目) を分析に用いた。

②は、中村・松田 (2013) が、松井・中村・田中 (2010) を参考に新たな項目を加えて構成したものである。大学不適応 (「大学をやめようかと思ったことがある」など)、大学満足 (「大学生活に満足している」など)、就学意欲 (「大学で学ぶことによって、自分の学力をさらに向上させたい」など) への回答を求める 14 項目 (6 件法) であった。①および②の質問項目を表 2 に示す。

表 2 大学不適応および関連要因を測定するために用いた質問項目

【就学意欲】 ($\alpha = .79$)

大学で学ぶことによって、自分の学力をさらに向上させたい

大学でさまざまなことを学んで知識や教養を増やしたい
大学で一生懸命学ぶことは、将来の仕事や人生に必ずプラスになると思う

勉強していろいろなことを学ぶのは楽しい

【大学満足】 ($\alpha = .86$)

大学生活に満足している

この大学に入って正解だった

大学にくるのが楽しい

大学の勉強に満足している

この学科に入って正解だったと思う

【大学不適応】 ($\alpha = .67$)

大学生活が辛い (つらい) と感じることもある

大学をやめようかと思ったことがある

まだ授業があるのに、意欲がわかなくて大学から早めに帰宅したいと思うことがある

授業がある日なのに大学を休みたくなることがある

大学を卒業できないかもしれないと思ったことがある

【大学への帰属意識 (大学への愛着)】 ($\alpha = .92$)

〇〇大学を気に入っている

自分にとって、〇〇大学は居心地がよくて、落ち着くことができる

〇〇大学は自分にとって大切な居場所である

〇〇大学が好きである

私は、〇〇大学に愛着がある

私は〇〇大学に受け入れられていると思う

〇〇大学の学生であることを誇りに思う

※〇〇大学とは、回答者が所属する大学を指す。

③は、測上 (1984) の「進学志望動機」、古市 (1993) の「大学進学動機」、子安・橋本 (2003) の「大学進学動機尺度」、三保・清水 (2011) の「大学進学理由尺度」を参考にして、これらの一部を引用し、新たな項目を加えて構成したものである。「キャンパスライフを楽しみたかったから」、「学

びたい学問分野があったから」、「自分の将来のためだと思ったから」など57項目から成る(6件法)。

④は、中村・松田(2013, 2014, 2015)で使用されたものであり、「大学の授業についていけない感じた」、「授業の内容が難しいと思う」、「大学の授業のレベルは高すぎると思う」、「大学での勉強方法(勉強のやり方)がわからない」の4項目(6件法)である。

⑤は、中村・松田(2013, 2015)で使用されたものであり、「大学に仲の良い友人がいる」、「大学にお互いに頼りあえる友人がいる」など9項目(6件法)である。

上述の通り、①～⑤は、いずれも6件法で測定したが、結果の集計・分析にあたっては、「まったくあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「あまりあてはまらない」を3点、「ややあてはまる」を4点、「あてはまる」を5点、「よくあてはまる」を6点と、得点化した。なお、①の「〇〇大学」とは、調査対象者が所属する大学を指す。

手続き

調査に先立ち、回答は強制ではなく、評価を伴わず、個人情報の開示されないことを説明し同意を得たうえで、講義時間中に集合調査を実施した。

結果

1. 大学への入学動機の尺度構成(表3)

まず、大学への入学動機に関する57項目を用いて因子分析(重み付けのない最小2乗法、プロマックス回転)を行った。いずれの因子にも高い負荷量を示さない項目、および、2つ以上の因子に対して高い負荷量を示す項目を除いたうえで、固有値の推移、因子の解釈の容易さを確認しながら因子数を変えて結果を比較検討し、最終的に10因子を抽出した(表3)。各因子は、因子負荷量が.400以上の項目群によって構成されているとみなして解釈を行った。第1因子は、「遊ぶ時間が欲しかったから」、「大学生らしい自由気ままな生活をしたかったから」など7項目が高い因子

負荷量を示しており、「自由・享楽」の因子とした。

第2因子は、「世間一般の評価を考慮したから」、「知名度が高い大学だったから」など6項目の負荷量が高くなっており、「知名度・評判」の因子とした。

第3因子は、「学びたい学問分野があったから」、「専門知識を深めたかったから」など6項目が高く負荷しているため、「学問的探究」の因子とした。

第4因子は、「自分の学力を考慮したから」、「入試の難易度を考慮したから」など5項目の負荷量が高いため、「偏差値との適合」の因子とした。

第5因子は、「将来に役立つと思ったから」、「将来の進路に必要なと思ったから」など4項目が高い負荷量を示しており、「将来展望」因子とした。

第6因子は、「他にやりたいことがなかったから」、「特にこれといった目標がなかったから」など3項目が高く負荷しており、「消極的選択」の因子とした。

第7因子は、「キャンパスの環境が良いと思ったから」、「大学の雰囲気が良いと思ったから」など3項目が高い負荷量を示しているため「環境のよさ」因子とした。

第8因子は、「多くの人と知り合いたかったから」、「課外活動(クラブ・サークル)を楽しみたかったから」など5項目の負荷量が高いため、「出会い・集い志向」因子とした。

第9因子は、「親や親せきが勧めたから」および「周囲の人が勧めたから」の2項目が高い負荷量を示しており、「周囲の勧め」因子とした。

第10因子は、「大学に進学するのが当たり前だと思っていたから」、「周囲の人が進学するから」など3項目の負荷量が高いため、「世間体・同調」因子とした。

尺度の信頼性係数(α 係数)は、.73～.93と概ね高い値を示しており、それぞれに内的一貫性があると考え、全ての回答者について、因子ごとに評定値の単純合計を項目数で除した平均値を算出し、これらを以降の集計・分析に用いた。

2. 基本統計と性差の分析(表4)

分析に先立って、就学意欲(4項目)、大学満

表3 大学への入学動機に関する因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8	因子9	因子10
	自由・ 享楽	知名度・ 評判	学問的 探究	偏差値 との適合	将来展望	消極的 選択	環境 のよさ	出会い・ 集い志向	周囲の 勧め	世間体・ 同調
遊ぶ時間が欲しかったから	.924	-.073	-.040	-.062	-.049	.014	.053	-.027	-.002	.037
大学生らしい自由気ままな生活がしたかったから	.922	.024	.015	-.010	-.026	.010	-.027	-.030	-.028	.051
大学で遊びたかったから	.904	-.055	.023	-.057	.007	-.034	.007	-.044	-.044	.075
遊べそうだったから	.827	.097	-.027	.071	-.089	.090	-.078	-.070	.087	-.047
一般にいう「楽しい大学生活」を経験したかったから	.815	.057	-.013	.046	.055	-.099	-.042	.036	.018	-.047
自由な時間が欲しかったから	.717	-.010	-.043	-.003	.034	.068	.073	.063	-.018	-.020
キャンパスライフを楽しみたかったから	.537	-.129	.079	.056	.057	-.066	.062	.330	.022	-.044
世間一般の評価を考慮したから	-.078	1.018	-.028	-.014	.023	-.039	-.073	.022	-.048	-.074
メディアなどで良く紹介される大学だから	.035	.909	.023	-.004	-.022	-.058	.042	-.097	.024	.013
知名度が高い大学だったから	.069	.843	.029	.026	-.053	-.124	-.007	-.019	.001	.096
社会的評価を考慮したから	.014	.774	.000	-.049	.000	.071	.146	.023	.009	-.103
大学の評判が良いから	-.046	.582	.009	.110	.083	.001	.259	.026	.007	-.040
見栄を張りがかった(自分を良く見せようと思った)から	-.065	.521	-.071	-.119	.093	.153	-.137	.138	.108	.036
興味のある分野を深く掘り下げたかったから	.043	.016	.913	.016	-.033	-.027	-.014	-.099	-.037	.033
学びたいことがあったから	.016	.016	.913	-.010	.009	-.019	-.004	-.127	.012	-.004
学びたい学問分野があったから	.052	-.019	.885	-.047	.012	-.018	-.022	-.071	-.022	.035
専門知識を深めたかったから	.013	-.014	.836	-.077	-.003	-.018	.068	.065	.005	.034
学問研究がしたかったから	-.061	.044	.598	.087	.012	.102	-.019	.140	-.020	-.078
専門的技術を修得したかったから	-.114	-.063	.575	.042	.040	.032	-.027	.246	.099	-.019
自分の学力を考慮したから	-.032	-.022	-.007	.954	.061	-.004	-.019	-.015	-.009	-.027
入試の難易度を考慮したから	-.009	-.033	.027	.891	-.017	.076	-.050	.003	.012	-.054
自分の成績に合っていたから	.031	-.085	-.038	.889	-.016	-.072	.040	-.031	.026	.046
自分の学力に合っていたから	.010	-.010	-.041	.864	.006	-.101	.046	-.004	-.046	.101
受験ランキングの位置を考慮したから	.011	.264	.089	.542	-.127	.110	-.018	-.001	-.006	.085
将来に役立つと思ったから	.005	-.057	.009	-.032	.897	-.009	.100	-.101	.036	.002
自分の将来のためだと思ったから	-.030	-.078	-.011	-.022	.850	-.037	.095	.007	.002	.094
将来の進路に必要なだと思ったから	-.019	.091	.024	.022	.722	-.036	-.038	.003	.003	.124
就職に有利だと思ったから	.064	.196	.009	.014	.502	.001	-.171	.022	-.043	.009
他にやりたいことがなかったから	-.005	.031	.058	-.025	-.048	.963	.043	-.059	-.003	-.005
特にやることがなかったから	-.040	-.115	.020	-.001	-.044	.954	.083	-.024	.019	.086
特にこれといった目標がなかったから	.162	.028	-.178	-.014	.059	.550	-.033	-.059	-.072	.076
キャンパスの環境が良いと思ったから	-.008	-.025	.010	-.012	.021	.077	.874	.049	.009	-.027
校舎の美しさなどの外観が良いと思ったから	.020	.194	.003	-.035	-.089	.037	.793	.034	-.033	.120
大学の雰囲気が良いと思ったから	.023	.123	-.033	.062	.163	.001	.617	-.057	.013	-.124
サークルや部活動に憧れて(あこれが見て)いたから	-.010	.031	-.011	-.047	-.169	-.118	.041	.749	.012	.232
多くの人と知り合いたかったから	.135	-.066	.030	.021	.107	.019	-.037	.741	-.013	-.233
課外活動(クラブ・サークル)を楽しみたかったから	.127	.045	-.026	-.086	-.093	-.145	.092	.637	-.041	.218
新しい友人を見つけたかったから	.313	.023	.022	.003	.122	.019	.012	.508	-.039	-.139
異性の友人を見つけたかったから	.152	.095	.077	.089	-.005	.189	-.070	.483	.000	-.045
親や親せきが勧めたから	-.004	-.048	.040	-.013	-.010	.009	.005	-.025	.895	.068
周囲の人が勧めたから	.048	.126	-.031	-.002	.033	-.037	-.012	-.018	.755	-.044
大学に進学するのが当たり前だと思っていたから	.010	-.042	.044	.042	.178	.019	.036	-.086	-.013	.727
周囲の人が進学するから	-.006	-.086	-.067	.090	-.027	.070	.021	.130	.134	.567
高卒が嫌だったから	.050	.079	.013	-.018	.163	.144	-.163	.107	-.079	.480
α 係数	.93	.92	.91	.92	.85	.89	.86	.84	.81	.73
因子寄与	11.59	6.01	3.68	2.96	2.11	1.63	1.48	1.32	1.10	1.00

重み付けのない最小二乗法, プロマックス回転

足（5項目）、大学不適応（5項目）の α 係数を算出したところ、それぞれ、.79, .86, .67の値を示した。大学不適応の値はやや低いものの信頼性が概ね確認されたので、尺度ごとに合成得点（1項目あたりの平均点）を算出して以降の分析に用いた。

表4は、各変数の基本統計および性差の分析結果を示したものである。就学意欲、大学満足、大学不適応に性差は見られなかった。大学への入学動機については、女子学生よりも男子学生のほうが「消極的選択」が高く（ $t(413)=2.61, p<.01$ ）、「環境のよさ」（ $t(415)=-2.18, p<.05$ ）と「周囲の勧め」（ $t(414)=-2.23, p<.05$ ）においては女子学生のほうが高かった。その他の入学動機に性差は認められなかった。

また、大学への入学動機を構成する各要因の平均値に差がみられるかを検討するために、男女を一括して被検者内要因による一元配置分散分析を行った結果、主効果が有意であった（ $F(9,3447)$

表4 各変数の基本統計および性差

	総平均 (SD)	男性 (SD)	女性 (SD)	t 値
就学意欲	4.29 (.77)	4.23 (.79)	4.34 (.76)	-1.38
大学満足	3.94 (.94)	3.94 (.95)	3.95 (.93)	-.18
大学不適応	3.48 (.94)	3.51 (.95)	3.46 (.94)	.57
大学への愛着	3.47 (.94)	3.44 (.98)	3.48 (.90)	-.42
【大学への入学動機】				
自由・享楽	3.63 (1.05)	3.69 (1.11)	3.58 (1.00)	1.00
知名度・評判	3.07 (.99)	3.00 (1.06)	3.12 (.93)	-1.27
学問的探究	3.96 (.94)	3.87 (.98)	4.04 (.89)	-1.76
偏差値との適合	3.64 (1.04)	3.61 (1.16)	3.68 (.94)	-.69
将来展望	4.21 (.99)	4.16 (1.07)	4.26 (.91)	-1.10
消極的選択	3.07 (1.25)	3.25 (1.27)	2.93 (1.22)	2.61**
環境のよさ	3.42 (1.11)	3.59 (1.15)	3.82 (1.08)	-2.18*
出会い・集い志向	3.46 (1.04)	3.44 (1.12)	3.48 (.99)	-.40
周囲の勧め	2.79 (1.12)	2.65 (1.13)	2.89 (1.11)	-2.23*
世間体・同調	3.77 (1.21)	3.65 (1.29)	3.86 (1.15)	-1.73

* $p<.05$, ** $p<.01$

=84.11, $p<.001$ ）。Bonferroni法による多重比較の結果、平均値が最も高い入学動機である「将来展望」は、「学問的探究」との間に1%水準で有意差があり、他のすべての入学動機との間に0.1%水準で有意差があった。そして、平均値が最も低い「周囲の勧め」は、「消極的選択」との間に10%水準で傾向差があり、他のすべての入学動機との間に0.1%水準で有意差が認められた。

3. 変数間の相関関係（表5）

表5は、就学意欲、大学満足、大学不適応と入学動機との間の相関関係を示したものである。これを見ると、就学意欲と「学問的探究」、「将来展望」、「環境のよさ」、「出会い・集い志向」、「偏差値との適合」との間に有意な正の相関関係がみられ、「消極的選択」との間に有意な負の相関関係がみられる。また、大学満足と「学問的探究」、「環境のよさ」、「将来展望」、「出会い・集い志向」、「知名度・評判」、「偏差値と適合」との間に有意な正の相関関係がみられ、「消極的選択」との間に有意な負の相関関係が認められた。さらに、大学不適応と「消極的選択」、「自由・享楽」との間に有意な正の相関関係がみられ、「環境のよさ」、「将来展望」、「学問的探究」との間に有意な負の相関関係がみられた。

4. 就学意欲、大学満足、大学不適応に影響する要因（表6）

入学動機の各因子が就学意欲、大学満足、大学不適応にどのような影響を与えるのかを検討するために、まず、就学意欲を基準変数とし、入学動機の各因子を説明変数とする強制投入法による重回帰分析を調査対象者全体および男女別に行っ

表5 「大学への入学動機」と就学意欲・大学満足・大学不適応・大学への愛着の相関関係

	大学への入学動機									
	自由・享楽	知名度・評判	学問的探究	偏差値との適合	将来展望	消極的選択	環境のよさ	出会い・集い志向	周囲の勧め	世間体・同調
就学意欲	-.075	.060	.447***	.116*	.387***	-.324***	.277***	.166**	-.038	-.063
大学満足	-.018	.140**	.395***	.117*	.323***	-.244***	.368***	.197***	.044	-.073
大学不適応	.136**	.033	-.131**	.031	-.132**	.214***	-.152**	.001	.053	.009
大学への愛着 (帰属意識)	.099*	.320***	.280***	.240***	.368***	-.124*	.474***	.308**	.165**	.028

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

た。次に、大学満足および大学不適応を基準変数とする同様の重回帰分析を行った。これらの結果をまとめたのが表6である。男女で異なる傾向がみられるので、ここでは、主として男女別に結果の概要を述べる。

就学意欲を基準変数とする重回帰分析の結果、全体では $R^2=.355$ ($F(10,372)=20.51, p<.001$)、男子学生では $R^2=.300$ ($F(10,150)=6.43, p<.001$)、女子学生は $R^2=.466$ ($F(10,210)=18.35, p<.001$)であり、それぞれ有意であった。標準偏回帰係数を見ると、男性においては、「将来展望」と「環境のよさ」が有意な正の係数を、「消極的選択」が有意な負の係数を示した。女性においては、「学問的探究」、「将来展望」、「出会い・集い志向」、「環境のよさ」、「偏差値との適合」が有意な正の係数を、「自由・享楽」、「知名度・評判」が有意な負の係数を示した。

次に、大学満足を基準変数とする重回帰分析の結果、全体では $R^2=.281$ ($F(10,369)=14.42, p<.001$)、男子学生では $R^2=.279$ ($F(10,149)=5.78, p<.001$)、女子学生は $R^2=.304$ ($F(10,208)=9.07, p<.001$)であり、それぞれ有意であった。標準偏回帰係数を見ると、男性においては、「環境のよさ」と「将来展望」が有意な正の係数を示したが、5%未満の水準で有意な負の係数を示した入学動機はなかった。女性においては、「学問的探究」、「環境のよさ」、「出会い・集い志向」、「将来展望」が有意

な正の係数を、「自由・享楽」、「知名度・評判」が有意な負の係数を示した。

さらに、大学不適応を基準変数とする重回帰分析の結果、全体では $R^2=.115$ ($F(10,373)=4.86, p<.001$)、男子学生では $R^2=.175$ ($F(10,150)=3.18, p<.01$)、女子学生は $R^2=.142$ ($F(10,211)=3.50, p<.001$)であり、それぞれ有意であった。標準偏回帰係数を見ると、男性においては、「環境のよさ」が有意な負の係数を示したが、5%未満の水準で有意な正の係数を示した入学動機はなかった。女性においては、「自由・享楽」、「消極的選択」が有意な正の係数を、「世間体・同調」、「出会い・集い志向」が有意な負の係数を示した。

5. 入学動機および大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響（パス解析）

入学動機の各因子が大学不適応に及ぼす影響を検討するために行った重回帰分析の結果は、就学意欲や大学満足を基準変数とする同様の分析結果に比べて R^2 が有意ではあるものの低い値を示していた。これは、入学動機が大学不適応に影響する要因としては説明力にやや乏しいことを意味する。

そこで本研究では、一連の先行研究（中村・松田、2013；2014）において入学目的の明確さが大学への帰属意識（大学への愛着）を媒介して間接的に大学不適応の低さに影響する傾向を示唆す

表6 就学意欲、大学満足、大学不適応の重回帰分析

R^2 を除く数値は標準偏回帰係数を表す

大学への入学動機 (説明変数)	基準変数								
	就学意欲			大学満足			大学不適応		
	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性
自由・享楽	-.187**	-.128	-.224**	-.173*	-.202 ⁺	-.176*	.196**	.129	.260**
知名度・評判	-.193**	-.205 ⁺	-.224**	-.116 ⁺	-.089	-.174*	.181*	.231 ⁺	.146
学問的探究	.230***	.115	.373***	.210***	.155 ⁺	.277***	-.023	-.104	.044
偏差値との適合	.049	.025	.116*	.023	.063	.000	.057	.092	.027
将来展望	.282***	.343***	.241***	.173**	.213*	.151*	-.109 ⁺	-.176 ⁺	-.038
消極的選択	-.153**	-.179*	-.125 ⁺	-.067	-.090	-.040	.122*	.095	.184*
環境のよさ	.204***	.212*	.173*	.283***	.301**	.262**	-.230***	-.313**	-.146 ⁺
出会い・集い志向	.195**	.171	.228**	.203**	.190 ⁺	.235**	-.061	.039	-.192*
周囲の勧め	-.042	-.101	.042	.013	.046	.029	.053	.006	.046
世間体・同調	-.013	-.116	.100	-.056	-.126	.024	-.155*	.009	-.298**
R^2	.355***	.300***	.466***	.281***	.279***	.304***	.115***	.175**	.142***

⁺ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

る因果モデルが得られていることをふまえて、そのモデルを援用して、入学動機が大学への愛着を高め、大学への愛着が大学不適応に負の影響を与えるかどうかを検討するための分析を行った。まず、入学動機を構成する因子のなかで大学への帰属意識（大学への愛着）に最も強く影響する動機を確かめるために、大学への愛着を基準変数とし、入学動機の各因子を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を男女別に行った。その結果、男女に共通して、モデル1において説明変数として「環境のよさ」のみが選択された（男性： $R^2=.204$, $F(1,156)=40.03$, $p<.001$, 女性： $R^2=.230$, $F(1,1218)=65.23$, $p<.001$ ）。標準偏回帰係数は、男性が.452, 女性が.480であり、いずれも0.1%水準で有意であった。これらの結果は、1つの変数を使用するのであれば、「環境のよさ」が最も有効であることを意味する。したがって、大学への愛着に影響する入学動機として「環境のよさ」を選択し、以降の分析に用いることとした。

次に、先行研究（中村・松田, 2013; 2014）に基づいて、「授業理解の困難さ」、「友人関係の良好さ」、「環境のよさ（入学動機）」が直接または「大学への愛着（帰属意識）」を媒介して間接的に大学不適応に影響するという一連の因果関係を想定したモデルを検証するためにパス解析を行った。回答者全体を対象とする結果を図1に示し

た。適合度指標の値から、データに適合した結果が得られたと言える。

標準化係数の正負と有意性をみると、「大学への愛着」から「大学不適応」に対する負のパスと、「授業理解の困難さ」から「大学不適応」に対する正のパスが0.1%水準で有意であった。また、「友人関係の良好さ」および「環境のよさ」から「大学不適応」へのパスは有意でないが、「友人関係の良好さ」から「大学への愛着」に対する正のパスと、「環境のよさ」から「大学への愛着」に対する正のパスが0.1%水準で有意であった。

考 察

本研究の目的は、大学生の入学動機がどのような要素・種類で構成されているのか、そして、これらの入学動機は就学意欲、大学満足、大学不適応にどのような影響を及ぼすのかを検討することであった。以下では、この2点を中心に調査の分析結果に基づいて考察を行う。

まず、先行研究で使用された入学動機・理由に関する尺度や質問項目を参考にして、それらの一部を引用し、新たな項目を加えたうえで作成した入学動機尺度57項目を因子分析した結果、10個の因子を抽出した。これらの入学動機のなかで大学生の平均値が最も高かったのが、「将来展望」

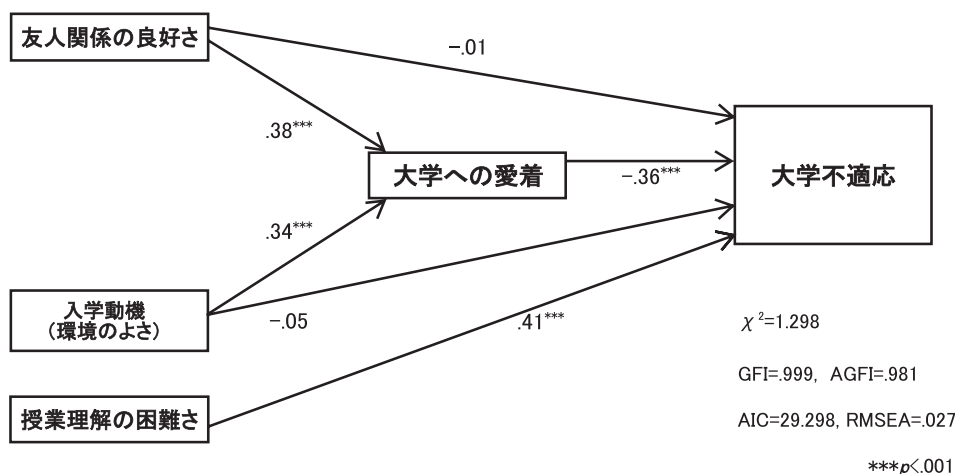


図1 大学不適応に影響する要因間のパス
(数値は標準化係数を示す)

であり、次いで、「学問的探究」、「世間体・同調」、「偏差値との適合」、「自由・享楽」、「出会い・集い志向」、「環境のよさ」の順に高かった。一方、「知名度・評判」、「消極的選択」、「周囲の勧め」は平均値が低かった。以上の結果は、大学生が将来のために興味のある専門分野を学びたいという成長・勉学への志向、そして、今や進学するのは当然だが自分の学力に合わせて大学を選んだとする現実志向、さらには、良好な環境の下で多くの人と出会い自由を謳歌したいという充実した学生生活への志向により進学したことがうかがえる。また、進学理由としてはあまり支持されなかったが、これといった目的がないままに知名度や周囲の勧めに応じたとする主体性に欠けた動機も見受けられる。

次に、これらの入学動機が就学意欲および大学満足にどのような影響を及ぼしているのかを分析した結果、男女に共通して、「環境のよさ」と「将来展望」が就学意欲を促進し、大学満足を高める傾向が示された。将来の就職や人生の目標を見据えたうえで良好な環境のもとで学びたいという動機による進学は、入学後の勉学への取り組みを促すとともに大学生生活全般におよぶ満足度を高めると考えられる。女子学生においては、「自由・享楽」と「知名度・評判」を理由に入学することが、就学意欲を抑制し、大学満足を低める傾向が示された。女子学生における自由気ままに大学生活をエンジョイしたいという志向や、名の通った大学であれば良いとする安易で軽薄な進学動機は、勉学への取り組みや大学生活の満足度に負の影響を与える可能性があると言える。

入学動機が大学不適応にどのような影響を及ぼすのかを検討するために行った重回帰分析の結果は、モデルの R^2 の値がやや低かったので、大学不適応を入学動機の要因のみで説明することは難しいと判断した。そこで、入学目的の明確さが大学へ帰属意識（大学への愛着）を媒介して大学不適応の低さに影響することを示唆する結果を得た先行研究（中村・松田、2013；2014）のモデルを援用して、「入学動機→大学への愛着→大学不適応の低さ」という一連の因果関係を検討した。

ここでは、入学動機のなかで大学への愛着に最も強く影響する要因である「環境のよさ」に加えて、先行研究で使用された「授業理解の困難さ」、「友人関係の良好さ」を用いてパス解析を行い、これらが直接または大学への愛着を媒介して大学不適応に影響するかどうかを検証した。その結果、「環境のよさ」は「友人関係の良好さ」とともに大学不適応に直接的な影響を及ぼさないが、大学への愛着を媒介して間接的に大学不適応を抑制する傾向があることが示された。したがって、先行研究において実証された“入学目的の明確さが大学への愛着を高め、大学への愛着が大学不適応を抑制する”というモデルと同様の因果関係が、具体的な入学動機（環境のよさ）と大学への愛着および大学不適応との関係においても支持されたと言える。

参考文献

- 瀬上克義 1984 進学志望の意思決定過程に関する研究
 教育心理学研究 第32巻第1号 59-63.
 古市裕一 1993 大学生の大学進学動機と価値意識 進路指導研究 第14号 1-7.
 本多公子・井上祥治 2005 高等学校における学級集団帰属意識尺度作成の試み 岡山大学教育実践総合センター紀要 第5巻 109-117.
 越 良子 2007 中学生の所属集団に基づくアイデンティティに及ぼす集団内評価の影響 上越教育大学研究紀要 第26巻 357-365.
 子安増生・橋本京子 2003 大学進学動機とポジティブな自己信念が大学生活におけるストレス対処に及ぼす影響 京都大学高等教育研究第9号 13-22.
 松井 洋・中村 真・田中 裕 2010 大学生の大学適応に関する研究 川村学園女子大学研究紀要 第21巻第1号 121-133.
 三保紀裕・清水和秋 2011 大学進学理由と大学での学習観の測定 - 尺度の構成を中心として - キャリア教育研究 第29巻 43-55.
 中村 真・松田英子 2013 大学生の学校適応に影響する要因の検討 - 大学不適応、大学満足、就学意欲に着目して - 江戸川大学紀要 第23号 151-160.
 中村 真・松田英子 2014 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 - 帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能 - 江戸川大学紀要 第24号 13-19.
 中村 真・松田英子 2015 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 (2) - 出席率、GPAを用いた分析 - 江戸川大学紀要 第25号 135-144.
 野寺 綾・中村信次 2011 向大学態度尺度開発の試み 日本福祉大学子ども発達学論集 第3号 71-80.
 高木浩人 2003 多次元概念としての組織コミットメント - 先行要因、結果の検討 - 社会心理学研究 第18巻第3号 156-171.